



Diversity in Research & Life

憲法第14条において「すべて国民は、法律の下の権利を享有し、また、法律の下の義務を負ふ」と規定された女子差別撤廃条約では、あらゆる形態の性差別を排し、政治的、経済的、社会的、文化的あらゆる分野で、女性と男性の同等的権利を確保する権利を認め、締約国の義務が明記されている。その後国際社会では、男女平等の精神が引き継がれ、ジェンダー平等の理念のもと、女性の人権及び基本的自由の保護と促進、女性の政治・社会的参加、及びエンパワーメントの推進などが重要であると考えられてきた。

1999年6月、国連採択された男女共同参画社会基本法は、「国は、互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮できる男女共生社会の実現」が21世紀の最重要課題に位置づけた。さらに、現在、2015年国連採択された女性活躍推進法において男女共同参画（ジェンダー平等）に対する取り組みを推進することが求められている。

大阪市立大学は、創設以来、大阪に住む人々の自由と共生の精神に支えられ、人権及び基本的自由を尊重する学風を築きあげてきた。2001年には、人権宣言を発表し、本大学を「すべての人間の尊厳と平等の精神に立脚した学問の場」と位置づけ、ダイバーシティ（多様性）の視点から性別に基いた差別的取扱いの是正を提言している。

大阪市立大学は、多様性の確保と多文化共生の実現を目指すこの提言に基づき、本大学における研究・教育、就業と家庭生活を両立させる課題を解決するために主体的に取り組むことを決意した。大阪市立大学は、次の3つの方向に基づき、ダイバーシティの視点からあらゆる人々が、多様性を認め合い、互に等しく知にひらき、個性と個性の能力をのびやかに発揮できる環境を備えるとともに、男女共同参画社会の実現に積極的に寄与することを宣言する。

＜基本方針＞

- 男女共同参画の視点に立脚した教育・研究・ワーク・ライフ・バランスの構築環境の整備及び支援
- 大学運営における意思決定の女性参画、国際的な女性活用のため国際的な女性リーダーシップ・アクションの推進
- 男女共同参画の視点に立脚した教育・研究・就業・生活の推進
- 地域社会や国際社会との連携を通じた男女共同参画の推進

大阪市立大学男女共同参画推進宣言

基本理念

国連総会において 1979 年に採択された女子差別撤廃条約では、あらゆる形態の性差別を排し、政治的、経済的、社会的及び文化的分野などすべての分野で、女性と男性の平等を享受する権利を確保する締約国の義務が明記された。その後も国際社会では、男女平等の精神が引き継がれ、ジェンダー平等の理念のもと、女性の人権及び基本的自由の保護と促進、女性の政治・社会参画、及びエンパワーメントの推進などが重要であると考えられてきた。

日本では、1999 年 6 月に制定された男女共同参画社会基本法において、「男女が、互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別にかかわりなく、その個性と能力を十分に発揮できる男女共同参画社会の実現」が 21 世紀の最重要課題に位置づけられた。さらに、現在、2015 年 8

月に成立した女性活躍推進法によって男女共同参画（ジェンダー平等）に対する取り組みを加速することが求められている。

大阪市立大学は、建学以来、都市大阪に住む人々の自由と共生の精神に支えられ、人権及び基本的自由を尊重する学風を築きあげてきた。2001 年には、人権宣言を発表し、本学を「すべての人間の尊厳と平等の精神に立脚した学問の府」と位置づけ、ダイバーシティ（多様性）の視点から性別に基づく差別的取扱いの是正を提言している。

大阪市立大学は、多様性の確保と多文化共生の実現を目指すこの提言に基づき、大学における研究・教育、就業と家庭生活を両立させる課題を解決するために主導的に取り組むことを決意した。大阪市立大学は、次の基本方針に基づき、ダイバーシティの視点からあらゆる人々が互いの多様性を認め合い、等しく知にひらかれ、等しく尊重され、個々の能力をのびやかに発揮できる環境整備に努

めるとともに、男女共同参画社会の実現に積極的に寄与することを宣言する。

基本方針

- 1. 男女共同参画の視点に立った教育・研究・ワークライフバランス等の就業環境の整備及び支援
- 2. 大学運営における意思決定への女性参画、上位職への積極的な女性登用のためのポジティブ・アクションの推進
- 3. 男女共同参画の視点に立った教育、次世代育成の推進
- 4. 地域社会や国際社会との連携・協働を通じた男女共同参画の推進

平成 27 年 10 月 22 日
大阪市立大学
学長 西澤良記

Statement	男女共同参画推進宣言	02
Index		03
Interview	下崎千代子 経営学研究科 教授	04
	杉田菜穂 経済学研究科 准教授	06
	金澤真理 法学研究科 教授	08
	伊地知紀子 文学研究科 教授	10
Message	西澤良記 学長	12
Column	安竹貴彦 大学史資料室長	13
Interview	益田晴恵 理学研究科 教授	14
	鍋島美奈子 工学研究科 准教授	16
	福島若葉 医学研究科 教授	18
	服部俊子 看護学研究科 准教授	20
	小池志保子 生活科学研究科 准教授	22
	阿久澤麻理子 創造都市研究科 教授	24
Column	服部良子 生活科学研究科 准教授	26
Message	大嶋寛 男女共同参画担当 副学長	27
Interview	藤井律子 複合先端研究機構 准教授	28
	中臺（鹿毛）枝里子 テニユアトラック特任准教授	30
	古久保さくら 人権問題研究センター長	32
	宮野道雄 女性研究者支援室 運営委員長	34
Message	女性研究者支援室の取組紹介	35

女性研究者の「いま」、そして「これから」が見えてきます。

本学の女性研究者 13 名に、研究者としてのライフスタイルをお聞きしました。それぞれのページでは、所属先の女性比率を視覚化しています。



Interview

しもぎ ちよこ

下崎 千代子

商学部・経営学研究科 教授



研究

多様で柔軟な働き方 (主としてテレワーク) とワーク・モチベーションが研究テーマです。大学院時代からの研究分野は情報管理で、情報とヒトという相補関係にある研究を両輪で進めているうち、『現代企業の人間行動』を出版して以降、人的資源管理研究者と評価されるようになり、日本における人事制度改革の研究にも取り組み始めました。そこでは、画一的な日本社会の働き方の変革が硬直的な日本の人事制度を変革する起爆剤となるという観点から研究しています。日本人の働き方を変えることが、日本の人事制度の変革を誘導し、日本の人事制度を変えることが日本社会の変革につながるという単線の思考ではありません

が、働くヒトが満足感や充実感をえることのできる社会を実現するには何が必要かというワーク・モチベーション論の問いはこの研究の基盤として変わりはありません。岩盤となった制度を揺さぶることの困難さを実務と理論の両方から感じているところです。

経験

中学・高校時代はバレーボール漬けの生活で、研究者タイプとはかけ離れた毎日を過ごしていました。大学に入学してからも卒業後は企業に就職というキャリア・イメージを持っていました。その変節点は 3 回生のゼミナールです。「組織とは何か」「情報とは何か」など、思考を巡らせて物事の本質を見極める楽しさに触れたのがきっかけです。とはいえ、研究者になる能力については不安があり、指導教授から大学院への勧めがあれば進学しようと考えていました。人生とは思えないもので、まずありえないと思っていた指導教授からの勧めがあり、大学院の受験勉強を始めたのは受験 1 年前です。猛勉強の結果、無事に合格、進学。博士課程 1 年の時、富山大学の経営学担当の就職話が舞い込んできました。当時は博士課程を修了しても博士号取得は難しく、就職のチャン

スがあればその道に進むのが賢明とのことで、初めて大阪を離れます。結婚・出産というライフイベントは富山で経験しました。育児休業のない頃でしたが、出産直後 1 年間はゼミ 1 コマだけの恵まれた環境でした。ただし、勤務は夜間でしたので子どもを預けるのには随分と苦労した記憶があります。奈良での 12 年間の子育て支援は私の両親の支援で仕事と育児の両立は問題のない時代です。神戸での 5 年半は、院生の教育や海外留学、公的な仕事などにも従事した時期で可能な限り新たなことに取り組めた時期です。現職に異動して 11 年間。赴任 2 年目に父が介護状態、その後母も病に倒れ、この 10 年間は人生最大の危機であったことは間違いありません。育児・家事ともに支援してくれた両親を介護する状況となると、2 倍の負担が増えます。何とか踏ん張っていた心も萎えてしまい、今は恩師の言葉どおり、無理せずできることだけに取り組んでいる現状です。私のワーク・ライフ・バランスは、同時期の実現ではなく、長い研究生生活の中でそのウェイトに変化がある長期的なバランスを取るようになりました。

コッソンというところまで考え抜けば、物事の本質をみることができます。

リフレッシュ

春は桜、夏はアルプス登山、秋は紅葉、冬はスキーと四季折々の自然を楽しむのが癒しです。雪解け水を沸かせて、青い空に美しい景色の中で飲む coffee は格別。あふれる物も豊富な知識もこの情景に勝ることは無いと感じる瞬間です。

メッセージ

「無理はしない」「できるときにできることを」「チャンスがあればそれを最大限活かさない」「コッソンというところまで考え抜けば、物事の本質をみることができます」「研究者は業績が一番」というのは、私の恩師からの教えです。これを指導原理として、研鑽を積んできました。これに加えて、社会科学を志す者としては、子育て・家事・介護や同世代の女性との交流によって社会の実態を知ることができ、研究からの知識を実際の面で検証できるという優位性があります。女性の立場からは生活に根差した経験を研究に活かして、社会に貢献できる研究を目指してほしいものです。



プロフィール

- 1977 大阪市立大学卒業
- 1979 大阪市立大学大学院 前期博士課程 修了
- 1980 大阪市立大学大学院 後期博士課程 退学
富山大学 助手→講師→助教授
- 1987 奈良産業大学 助教授→教授
- 1999 神戸商科大学 教授
- 2005 大阪市立大学 教授

主要業績

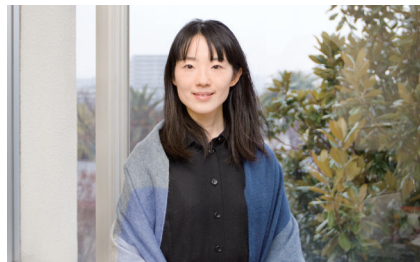
- ・下崎千代子 1991 『現代企業の人間行動』白桃書房
- ・下崎千代子・小島敏宏編 2007 『少子化時代の多様で柔軟な働き方の創出—ワーク・ライフ・バランス実現のテレワーク』学文社

Interview

すぎた なほ

杉田 菜穂

経済学部・経済学研究科 准教授



研究

優生学をご存知ですか。19世紀末から20世紀初頭の西欧社会を中心に広く行きわたった、よりよい〈生〉のための学問です。人の能力や人格形成に重要なのは生まれか育ちか（nature or nurture）ではなく、生まれも育ちも（nature and nurture）というのが今日の通説ですが、当時のよりよい〈生〉をめぐる議論には生まれを重視する優生学（eugenics）の立場と育ちの改善を重視する優境学（euthenics）の立場がありました。両者は対立しつつも、よりよい〈生〉を希求する優生-優境主義として当時の時代思潮となりました。日本にも及んだこの潮流は、貧困や格差、児童愛護、母性保護の問題をめぐる政策論議

や社会運動の盛り上がりとなって現れました。それが、社会政策の形成、発展に大きなインパクトを与えたと考えられます。

「よりよい〈生〉への関心が、社会政策の史的展開にどのような影響を与えたのか」「よりよい〈生〉についてどのように考えればよいのか」といった問いに挑んでおります。

経験

私は、男女共同参画社会基本法が施行された1999年に大学に入学しました。男性も女性も意欲に応じてあらゆる分野で活躍できる社会の実現を唱えるこの法律によって、眠っている女性力を社会に引き出すための取り組みが一層強化されることになりました。男女平等を推し進めるための課題や政策について講義や演習でもたびたび取り上げられたので、教室での学びを通じて女性のキャリア、仕事と子育ての両立といったテーマに対する関心、問題意識、学びを深めていくことができました。

卒業研究では「女は損なのか」「女しか産めない」という生物学的な現実社会がどう向き合えばよいのか」「女性の社会進出と少子化問題の解決を両立することはできないのか」といった問いに

ついて、指導教員の指導と文献、インタビューなどを頼りに自分なりの考えを深めていきました。そんな突き詰めて考える時間を過ごすなかで、進学という進路を意識しはじめたように思います。もっと知りたい、調べてみたいという思いがよいよ強くなった4回生の夏に、進学を決意しました。大学院では、人口問題と社会政策を歴史的に関連づける作業に取り組みしました。具体的には、両大戦間期のスウェーデンに起源がある家族政策の日本的動向について考察を深めました。修士課程3年、博士課程3年の研究成果をまとめた博士論文「戦前日本の児童・人口問題と社会政策」は、現在の研究活動の土台となっています。

研究中心の生活ですが、俳人としての活動も大切にしています。実は研究歴よりも俳句歴の方が長くて、私が発した言葉を母が5・7・5に整えてくれるというふうに、幼少期の母との言葉遊びから詩のある生活がはじまりました。俳句と向き合う時間は、論理的な長文から解放される貴重な時間です。俳句より少し長い、5・7・5・7・7の短歌も作ります。

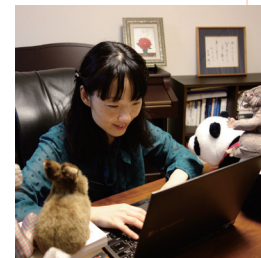
「女しか産めない」という生物学的な現実社会がどう向き合うのか。

リフレッシュ

愛らしい動物を眺めているとホッとするので、動物のぬいぐるみに囲まれて暮らしています。隙間時間をみつけて小説を読むことや詩を作るのも、楽しみです。常に躓いている感じの研究生活は精神的に孤独に陥りがちなので、友人や同僚、学生さんとのおしゃべりの時間も大切にしています。

メッセージ

子どもたちから「あんな人になりたい」と言われてみたいです。そのためにというわけでもありませんが、「どう楽しむか」という姿勢を大切に研究活動に取り組んでいます。もちろん生きていたら嫌なこと、辛いことにも直面するのですが、何事においても出来る限り楽しめるように方向づけるといいです。「どうせなら楽しみながらやったほうがいい」という姿勢こそが、人生を切り開いていくような気がしています。



プロフィール

- 2003 大阪市立大学 卒業
- 2006 大阪市立大学大学院 前期博士課程 修了
- 2009 大阪市立大学大学院 後期博士課程 修了 博士（経済学） 大阪市立大学大学院 CREI 研究員
- 2010 同志社大学 講師
- 2014 大阪市立大学 准教授

主要業績

- ・杉田菜穂 2010『人口・家族・生命と社会政策—日本の経験』法律文化社
- ・杉田菜穂 2013『〈優生〉・〈優境〉と社会政策—人口問題の日本的展開』法律文化社

かなざわ まり

金澤 真理

法学部・法学研究科 教授



研究

刑事法、例えば、どのような行為が法律上犯罪として処罰されるかを全般的に研究しています。特に、「犯罪が完成しない未遂、中でも「自己の意思」で「中止した」ことで未完の場合、少なくとも必ず刑が減輕されるものを中止未遂というのですが、この制度の成り立ちや、どういう場合に中止したと言えるかの要件を、諸外国の類似の制度と比較しています。同じ殺人未遂でも、凶器を構えたけれど思いとどまった場合や、ケガをさせたけれど病院で手当を受けさせて助けた場合とで扱いは違うか等、検討する点は多岐にわたります。また、刑余者（刑を終えた犯罪者）等が社会に復帰する際、社会の側にどのような受入体制が必要

かも構想しています。日本では、明治期以来、民間の篤志家が率先して、社会に居場所や就労場所を提供してきました。日本の実践に倣って、外国にもこれを取り入れた例があります。産業構造や社会意識の変化により、犯罪者の社会復帰が、より難しくなった現代社会のあるべき制度設計が課題です。

経験

子どもの頃から法律に関心がありました。いろいろな人が集まり、分業によって形作られる社会のしくみに興味がわきました。刑事法に興味をもったきっかけは、米国のテレビドラマ『弁護士ペリー・メイスン』の原作となった E. S. ガードナーの小説です。法律家は「法の番人」であるだけではなく、訴えられた人を助ける役目もあると知りました。社会の矛盾を法律で解決するには、理屈にあわない社会の事柄にも適用できる論理を見出すことが課題です。人工的な制度を支える法律には、何でも“割り切れる”という発想が根本にありそうですが、世の中の多くのことは“割り切れない”ことが多いのです。何故なら人間はときに矛盾にみちていて、合理的で妥当な判断をせずに、あえて別の決断をしたりするからです。判

決を下さなければならぬ裁判官と違い、法学者は、多様な人間が集まって形成する社会の中に課題解決の答えを見つけようと、悩み続けられるのが特徴です。論文の形で自分の考えを発表するときは、学者として明快な答えを出す必要があり、結論に至るまで、自問自答の連続ですが、とりくみがいががあります。

私の研究の原点は、大学での刑法の手ほどきをしてくださった恩師との出会いにあります。人に刑罰を科す論理である犯罪論では、理論的厳密性、緻密性が特に要求されますが、それを身をもって教えてくださった師の下で学ぶ決意をしました。法の運用には、生身の人間に対する厳しさと温かさが不可欠で、法解釈者の姿勢も反映します。学生時代は、飲酒等、一時的に自己コントロールができない状態になった人の刑事責任を問えるかを探究する「原因において自由な行為の理論」、大学院では犯罪着手後に自己の意思で中止する「中止未遂の理論」を研究しました。歌人としても活躍され、文学、哲学へも関心が広く及び、「解釈論だけしていてももしかたない」とおっしゃる先生には、特に、言葉を厳密に用いる姿勢を学びました。これは、ゲーテを座右に文学、哲学への深い造詣を身につけられた、師のそのまた恩師から伝えられたものです。

人間はときに矛盾にみちていて、合理的で妥当な判断をせずにあえて別の決断をすることがあります。

リフレッシュ

映画鑑賞等。ただし、「完全オフ」の必要性はないかもしれません。心身の休息は必要ですが、様々な人間の作る社会を研究テーマにすると、研究とそれ以外の時間を完全に分けるのは難しいのです。日々のニュースで取り上げられる社会の事象すべてが研究の種、反面、SF 映画や推理小説が課題解決のヒントとなり、その探求こそが研究の醍醐味と思っています。

メッセージ

解決できない謎への興味を持ち続けてほしいと思います。自分だけで解明できない大きな課題であっても、他人と共有することで、また次の世代にバトンタッチすることで、誰かが解いてくれるかもしれません。いまは無理だと思えても、課題解決のために日々実践の努力を怠らないことが大切で、それこそが人間の存在を一層価値のある、尊いものにすると思っています。また、そうした努力の積み重ねの中から新たな発見が生まれることもあると思います。



1949（昭和 24）大阪市立大学（新制）の設立に伴い法文学部が設置される
1953（昭和 28）法文学部が改組され、法学部へ

プロフィール

- 1990 東北大学 卒業
- 1998 東北大学 博士課程後期 修了
山形大学 講師→助教授
- 2003 ドイツ・フライブルク大学
刑法法理論研究所客員研究員
- 2010 大阪市立大学 教授
- 2013 女性研究者支援室 室長
- 2015 法学研究科 研究科長

主要業績

- ・金澤真理 2006 『中止未遂の本質』成文堂
- ・内田博文・佐々木光明編 2012 『〈市民〉と刑事法（第3版）』日本評論社（共著）
- ・刑事立法研究会編 2012 『非拘禁的措置と社会内処遇の課題と展望』現代人文社（共著）

いぢち のりこ

伊地知 紀子

文学部・文学研究科 教授



研究

私の関心は、人生の軌跡から歴史と社会を考えることにあります。いつの時代、いかなる社会にも変化があり、人は対応を求められます。こうした人々の生への学びをとおして、自分が生きる社会や時代を見る「もう一つの目」を身につけることができます。私の場合、具体的な調査研究地域は朝鮮半島と日本です。なかでも植民地期以降の済州島から日本・大阪へ移動した人々の暮らしおよび出身地の変容について研究してきました。また、こうした人びとの生活史調査を15年ほど続けており、個別に編集した内容を日本で大学紀要に掲載し、数名ずつまとめ韓国で書籍出版しています。済州島のチャムス（海女）の移動と生活に

ついて調査していて、たまに自分も潜ったりします。今年の5月に出版した本は、在日朝鮮人による酒づくりについてです。また、最近はベトナムでも調査を始め、冷戦構造によってもたらされた生活変容について中部の漁村でお話を伺っています。

経験

大学では4年間、英語学と英米文学を勉強していました。イギリスに留学して初めて、日本について語る語彙の少なさと知識の浅さを実感し、もう少し近い地域の異文化に触れてみようと思行きました。「南京大虐殺記念館」の古い建物の中に積み上げられた頭蓋骨を見ながら、欧米中心に作られてきた自分の知識の偏りに改めて気づきました。当時大学におられた社会学の先生の助言もあって、アジアにおける日本を考える上で、在日コリアンについて勉強してみようと思に至りました。大学院入学以後は、フィールドワークや生活史調査について学んできました。

この頃、在日コリアンについての文献は数少なく、差別と闘う勇ましい姿か、ただ苦しむ姿は記述されていましたが、日々の暮らしのありようや等身大の姿はわかりにくい。そこで、直接お会い

しようと、在日コリアンが日本で最も多く在住する生野区にある識字学級「オモニハッキョ」（お母さん学校）に通うようになりました。生徒さんの平均年齢は70歳前後で、そのくらいの年齢になって初めて鉛筆を持つ方が少なくありませんでした。こうして出会った1世の女性たちへ生活史を伺い修論を作成しました。

出会った方々の縁で、済州大学校へ留学しました。大学には行かず、島の北東部の漁村へ住み込んで村の人たちと海に潜ってサザエやテングサを採ったり、人参畑に行って労賃ももらい、ニンニク植えや大根の収穫にいったりしました。長期では2年住み、その後も済州へ通い続けもう20年が過ぎました。多くの方々にお世話になりながら、植民地支配、解放、冷戦構造のなかでの4・3事件、朝鮮戦争といった激動とともにあった20世紀の済州島の生活の変化について学んできました。激動のなかで、人々の間に亀裂が入り、溝が生まれて反目し合う。一方で新たなつながりも生まれ互助の営みが築かれていく。こうして学んできたことは、決して済州島に特異なものではなく、今を生きる私たちの生活とつながっています。

積み上げられた頭蓋骨を前に、日本社会を問い直す。

リフレッシュ

特別な息抜きというのはありませんが、フィールドワークに行っているんな方にお会いして話を伺うのが好きです。家にいる日は、家族と過ごします。今年中学校1年生になる娘と一緒に声を合わせて歌うと、とても晴れやかな気持ちになります。また、私も夫も喫茶店巡りが好きなので、家族3人で出かけるのが楽しみです。

メッセージ

私個人の経験として、就職後に男性中心社会だと感じるがよくあり、特に妊娠、出産、育児のなかで配慮のなさを実感しました。これは産む女性だけの問題ではないでしょう。身体や家庭にさまざまな事情を抱えた人はいるはずで、働くということはこうした人・事への考慮と配慮とともに成り立つものです。調査研究や職場のなかで不条理なことに出会ったら、ひとり抱え込まず隣近所に話題を持ちかけることが肝要かと思います。



1949（昭和24）大阪市立大学（新制）の設立に伴い法文学部が設置される
1953（昭和28）法文学部が改組され、文学部へ

プロフィール

- ― 1989 神戸市外国語大学 卒業
- ― 1993 大阪市立大学大学院 前期博士課程 修了
- ― 1997 大阪市立大学大学院 後期博士課程 単位取得満期退学
日本学術振興会 特別研究員（PD）
- ― 1999 博士（文学）
- ― 2000 愛媛大学 助教授
- ― 2011 大阪市立大学 准教授
- ― 2014 大阪市立大学 教授

主要業績

- ・ Ijichi et al. 2015 *Rethinking Representations of Asian Women: Changes, Continuity, and Everyday Life* Palgrave
- ・ 伊地知紀子 2015『消されたマッコリ。―朝鮮・家醸酒（カヤンジュ）文化を今に受け継ぐ』社会評論社

西澤良記

大阪市立大学長

大阪市立大学では、平成 24 年度に女性研究者支援室を起ち上げ、男女共同参画の理念に基づき、女性研究者が最大限にその個性と能力を発揮できる環境整備に努めています。

女性研究者の積極採用・上位職への積極登用は、重要な課題です。ただし、目標数値を達成するだけでは十分でなく、今後も男女共同参画の理念を形骸化させぬよう、実のある取り組みにつなげていく必要があります。本学では、インセンティブ

経費の設置や、女性限定公募を実施し、各部局の事情や当該分野の女性研究者の実情にそった採用・登用の制度を構築しています。さらに、出産・子育て・介護等のライフイベントに応じた支援制度、オンラインで情報交流ができるネットワークシステム、男性育児休業取得等の意識啓発、若手研究者の育成に取り組んでいます。

女性研究者研究活動支援は、女性に限定した効果をもたらすのみでなく、すべての研究者のワーク

ライフ・バランスの実現に向けた大きな挑戦です。本学は、「男女共同参画推進宣言」のもと、全学をあげて研究者と研究者を志す皆様を支援していきます。

西澤良記

高田コスエ先生——西区高等実修女学校から市大家政学部へ

安竹貴彦 法学研究科 教授／大学史資料室長

本学の生活科学部の源流は、現時点では大正 10（1921）年創立の「大阪市立西区高等実修女学校」とされています。この学校は、家庭生活と社会生活とを一つの単位として見、この二つを有機化することを教育方針としていました。本科 4 年（家政科と商業科、大正 11〔1922〕年に商業科は経済科と改称）と、その上に高等科（補修科 1 年および専攻科 2 年）が設けられていました。

開設に際しては初代校長の谷馨氏が中心となり、この建学の精神にふさわしい教員を選んでいたようですが、そのなかの一人に高田コスエ（当時は小村姓）という女性がいました。東京女子高等師範学校出身で、担当は家政科のなかの裁縫科であったようです。

高田先生は、その後の高等西華女学校・西華高等女学校でも教職にあり、やがて中心的な存在になっていきます。当時は日本が戦争へと突き進んでゆく時期とも重なっており、女子教育もその影響を強く受けました。大学史資料室所蔵の高田先生による新聞寄稿記事の一つ「私たちの設計よ けふから三日間、西華高女で 戦時の市民生活展」と題する記事（大阪毎日新聞、昭和 13〔1938〕年 9 月 23 日）には

大阪市立高等西華女学校では戦時市民生活運動に参加するため西区町会連合会と連絡をとり、衣服更生等各種の運動を提唱していたが同校生徒たちもわたしたちの手で立派な戦時市民生活展覧会をこしらへようとして高田と志す先

生らの指導で一頁をめざましい研究を続けた結果けふから三日間お自慢の展覧会が同校でひらかれる運びとなった（後略）と記されています。昭和 15（1940）年には「女子青年家庭科教本」と題する教科書（全 3 巻）も執筆しています。

高田先生は謹厳な教員であったようです。創立十周年記念誌（昭和 6〔1931〕年）には、元同僚による（着任時の）歯切のよい御挨拶も耳に残っているように思われるという思い出や、「紋附」を常時着用していたことが記されていますし、卒業生による回顧にも「日常的に袴姿で授業をなさっておられました」とあります（佐野智恵「大阪市立西華高等女学校の被服教育」、大阪市立大学史紀要第 3 号。佐野さんは昭和 22〔1947〕年専攻科卒業）。

また、教え子のひとり古作ケイ子さん（昭和 22〔1947〕年西華高等女学校専攻科卒業、市立女子専門学校・市大家政学部勤務）は、大学史資料室によるヒアリングに「非常に厳しい先生であった。被服科が発展したのはこの先生のおかげかもしれない。女学校の中心的存在であった。」と述べられています。

しかし、厳しいだけではありませんでした。上記記念誌には、高田先生を慕う卒業生の寄稿記事がずいぶん見受けられますし、佐野さんも、家庭科教師を志望した理由のひとつに「高田コスエ先

生の威厳のある教師像」をあげておられます。

さて、市立西華高等女学校は、昭和 22（1947）年 4 月に大阪市立女子専門学校となります。被服学科・英語学科・育児学科の 3 科で、昭和 25（1950）年には生活学科が増設されました。女子専門学校は昭和 24（1949）年に市立大学家政学部へと発展しますので、同 26（1951）年 3 月に閉校となりましたが、高田先生はこの女専でも教授として「和裁、手芸」の講義を担当していました。さらに市立大学家政学部においても被服学科助教授として、昭和 27（1952）年 3 月末まで勤務していました。

高田先生が本学「最初の」女性教員・研究者であったかどうかは定かではありませんが、30 年以上にわたり前身諸校や本学に貢献した女性教員・研究者であったことは間違いありません。大学史資料室では、今後もこうした本学の先達に少しでも光を当てていきたいと思っています。



高田コスエ先生

ますだ はるえ

益田 晴恵

理学部・理学研究科 教授



研究

地球化学の分野で水-岩石相互作用が専門です。聞きなじみがないでしょうが、水が移動することで起こる地球上の現象を観察や実験・分析などから解き明かすのが仕事で、世界の地球科学分野では割と研究者が多い分野ではあります。私は、その中で、地殻内部の水とそれともなう物質移動を研究してきました。陸上では、大阪平野の地下水の貯存状態を水質から追跡することや、アジアにおける地下水や河川水の汚染について研究をしてきました。特に、南アジアで起こっている自然由来のヒ素汚染地下水の形成メカニズムの解明では多くの論文を公表しています。また、海底堆積物中で起こる加水・脱水反応ともなう鉱物組

成変化や海底火山活動とそれともなう海底熱水系に関与する水の働きについて研究を行ってきました。これらの研究のために、現地に出かけて、地下水、堆積物、岩石などを採取し、研究室に持ち帰って分析しています。

経験

子どもの頃から理科と自然地理が好きでした。母は新制中学1期生ですが、戦後のどさくさでたいへん苦労を重ねたため、娘が自立できる職業に就くことを強く望んでいました。理学部へ進学すると伝えた時、母には反対されました。私たちの世代は、4年制大学を出ても女性が一生続けられる職種はそれほど多いわけではありませんでした。医学部や薬学部などと違い、将来の職業に対するイメージが母には持てなかったのだろーと思ひます。大学院へ進学したいと言った時には喧嘩しました。最終的には、父が、「そんなに勉強したいのなら、好きなだけさせてやれ」と言ってくれました。

先生との出会いに恵まれ、後期博士課程に進学しました。卒研と前期博士課程で指導して下さった先生は、「初めて指導する女子学生の人生を、どうすれば拓くことができるのか」とまじめに悩

んだと、後年教えてくださいました。後期博士課程では、本学に学籍をおいたままで、岡山大学温泉研究所（当時）と東京大学海洋研究所（当時）で研究を行いました。先生たちには、娘のように大切に育ててもらったような気がしています。

今まで家族・同僚や友人たちにとっても恵まれてきました。学生時代から遠距離恋愛を続けていた夫は、私が研究上のことで迷っている時に、背中を押してくれる人です。大学へ就職したことを喜んでくれた母は私が就職して間もなく亡くなりましたが、フィールド科学者として出張の多い私に代わって、姑が子守りを引き受けてくれました。学生時代から今日まで研究航海や野外調査で、「同じ釜の飯を食べた」仲間が大勢いて、今でも困った時には助けてもらっています。私は本学の教員で育児休業を最初に取った（1996年）人らしいのですが、理解のある教室の同僚たちのおかげです。恵まれた人間関係を財産と呼ぶならば、私はずいぶん裕福だと思います。

リフレッシュ

乗り鉄です。みずほで鹿児島大学へ、名鉄で岐阜大学へと、新しい路線開拓のために出張依頼をホイホイ引き受けてきました。4月の東京出張では、全線開業間もない北陸新幹線のグランクラスに乗って金沢周りで帰阪しました。毎週東京へ通うこともあり、帰途ののぞみで駅弁とビールで一人飲み会をするのがささやかな楽しみです。

メッセージ

普通の女性が、家庭生活と両立させながら、社会の中で活躍しやすい環境を残してあげることも私の大事な仕事だと思っています。特に、娘が生まれてからはその思いを強くしています。そのためにもいい仕事を続けたいと思います。

努力が実を結ばない時期もありますが、がんばっていることを認めて助けてくれる人は必ずいます。若い人には、辛いことがあっても、諦めないで社会の中で自分の居場所を見つけて欲しいと思います。



プロフィール

- 1980 大阪市立大学 卒業
- 1984 東京大学大学院 特別研究学生
- 1986 大阪市立大学大学院 後期博士課程 修了
日本学術振興会 特別研究員（PD）
- 1988 大阪市立大学 助手
- 1993 大阪市立大学 助教授
- 2007 大阪市立大学 教授

主要業績

- ・益田晴恵編著 2011『都市の水資源と地下水の未来』京都大学出版会
- ・Masuda H. et al. 2012 "Chlorite-source of arsenic groundwater pollution in the Holocene aquifer of Bangladesh." *Geochemical J.* 46: 381- 91
- ・Masuda H. and Fryer P. 2015 "Geochemical characteristics of active backarc basin volcanism at the southern end of the Mariana Trough." in "Subseafloor Biosphere Linked to Global Hydrothermal Systems; TAIGA Concept," Springer Japan: 261- 72

なべしま みなこ

鍋島 美奈子

工学部・工学研究科 准教授
女性研究者支援室 室長

研究

私は学生時代、本学生生活科学部居住環境学科で住宅の温熱環境やエネルギー消費構造について研究していました。博士号取得後は研究の場を本学工学研究科都市系専攻に移し、都市レベルでの「熱エネルギー有効利用技術」の研究、「ヒートアイランド対策」の研究を中心に取り組んでいます。研究対象は、建物の室内から、建物群、都市へと徐々に広がっていきました。最近、温泉熱や排湯の熱エネルギーを有効活用し、地域全体の給湯用のエネルギー消費量の削減をめざす研究を行っています。温泉地域の宿泊施設の協力を得て、機械室で源泉温度や排湯温度、給湯用ボイラー稼働状況を調査しています。この研究では、普段見

ることのできないホテルの裏側に入れたり、温泉の泉質に詳しくなったり、研究に付随する楽しみもあります。また、ヒートアイランド対策に関する研究テーマとして、街路樹などによる歩行空間の温熱環境緩和効果を明らかにする調査をおこなっています。2015 年は大阪府涼しい道（クールロード）100 選を企画し、普及啓発活動にも尽力しています。

経験

建築士になりたいという漠然とした夢を抱き、1990 年、第一志望だった本学生生活科学部生活環境学科に入学しましたが、大学時代はクラブ活動（体育会ヨット部）に没頭し、ほとんど勉強せずに 4 年生になってしまいました。クラブ引退後は一念発起し、卒業研究だけは真剣に取り組みました。環境制御学講座（当時）の先生のご指導のもと床暖房などの住宅設備や室内温熱環境評価を研究テーマに、文献調査、実験計画・実施、データ分析という一連の研究プロセスを学び、主体的に取り組む研究の面白さに気づくことができました。先生との出会いが研究者をめざすきっかけとなります。

前期博士課程で研究を進めていくなかで、「研

究者に向いているかも」と思い込み、ほとんど迷うことなく後期博士課程への進学を決めて、先生に伝えました。その時に言われたのが、「女性で博士号を取得すると嫁に行きにくくなるかもしれないよ。就職先を探すのは助けてあげられるけど、結婚相手は自分で見つけて下さいね」でした。先生のアドバイスを肝に銘じ、学会で培った人脈を駆使して婚活にはげみ、私が D1（25 歳）の終わり頃、他大学の土木工学科で助手をしていた夫と知り合い、結婚することができました。

研究の方も的確なご指導のおかげで、M2～D2 の頃に査読論文を数本投稿し、D3 の途中から日本学術振興会の特別研究員に採用され、お給料と研究費がいただけるようになり、研究に集中することができました。D3 の 3 月に博士号を取得し、同年 4 月に新設された本学工学部環境都市工学科に助手として採用されました。先生のご推薦で、職探しに苦労することなく就職することができました。

就職に関する私の経験はタイミングと運が大半で、今の若手研究者にはほとんど参考にならないと思いますが、当時は、日々全力で目の前の課題に取り組み、いつ来るかわからないチャンスに備えていたと思います。

出産、育児、介護といったライフイベントだけでなく、健康面全般からのサポートの必要性を痛感しています。

リフレッシュ

図書館や本屋に行って、本をあれこれ選んだり、座って読書をする時間がもっともリラックスできる時間です。子どもの頃は近所の図書館で、文学全集、歴史漫画、推理小説、インテリア・建築関係の雑誌などを読んで空想の世界に浸っていました。最近は時間ができれば大学の図書館に行って、研究に関する本を探します。新旧の名著に出会った時、すごく嬉しく楽しい気分になります。本の匂いも好きなので、私にとって図書館はパラダイスです。数年前から旅行の時などは Kindle を重宝しています。

メッセージ

研究者としてのキャリア形成は比較的順調でしたが、健康面では思い通りにいかない事が多くありました。30 代の初め頃、右脚にしびれがでて腰部神経しょう腫と診断されて手術をしました。子宮内膜症も発覚しました。40 代になって、初期の乳がんが見つかり手術をし、現在も抗がん剤治療を続けています。私の場合、いずれも不幸中の幸いで重症化することがなかったので、仕事のペースは落ちることがあってもキャリアを中断す

程ではありませんでしたが、闘病生活が長引けばキャリア継続の大きな危機になると思います。出産、育児、介護といったライフイベントだけでなく、健康面全般からの女性研究者のサポートの必要性を痛感しています。

女性研究者にとっては、20～30 歳代のキャリア形成に重要な時期と妊孕性（妊娠できる能力）が高まる時期が重なり、40～50 歳代は更年期で自身の体調の変化が訪れる時と親の介護が重なるなど、心身ともに負担が大きくなりやすいことが知られています。キャリア継続のためには女性研究者特有の状況を理解し支援する体制が不可欠です。ようやく本学も女性研究者支援室を中心に本格的な支援体制が整ってきました。ライフイベント時だけでなく、女性特有の病気や症状に遭遇した際も、ぜひ女性研究者支援室に相談してください。



プロフィール

- 1994 大阪市立大学 卒業
- 1996 大阪市立大学大学院 前期博士課程 修了
- 1998 日本学術振興会 特別研究員（DC2）
- 1999 大阪市立大学大学院 後期博士課程 修了博士（学術）
大阪市立大学 助手
一級建築士 資格取得
- 2005 大阪市立大学 講師
- 2012 大阪市立大学 准教授
- 2015 女性研究者支援室 室長

主要業績

- ・鍋島美奈子・榊愛 2006『SIS 入門—基礎から学ぶ GIS』古今書院
- ・日本ヒートアイランド学会編 2015『ヒートアイランドの辞典—仕組みを知り、対策を図る』朝倉書店（共著）
- ・鍋島美奈子・森本太一・西岡真穂 2014「交野市私市地区の実測調査に基づく夏季における夜間冷気流の流入予測」『環境情報科学学術研究論文集』28: 385-90
- ・日本ヒートアイランド学会論文賞 受賞 2013
- ・大阪市環境表彰 受賞 2014

ふくしま わかば

福島 若葉

医学部医学科・医学研究科 教授



研究

医学部というと「病院」「医療」などの言葉を思い浮かべると思います。でも、「病院」という場での「医療」だけで、人々の健康を守ることができるでしょうか？公衆衛生学は、その疑問に答えを出せる研究分野の1つです。まだ病気になっていない方も含めて、病気の予防や早期発見に貢献するための研究をしています。

私自身の主な研究テーマは、インフルエンザをはじめとするワクチンの有効性・安全性評価、難病の患者数把握およびリスク因子・予防因子の解明、検診の受検勧奨を効果的に進めるための手法、などです。いずれの研究も、細胞や実験動物を扱いません。多くの方々に調査へのご協力をいただ

いて情報を集め、「集団」としての検討を行いますので、疫学（epidemiology）という理論を用います。

当教室では、他にも様々な病気を対象に疫学研究を行っています。興味のある方は、ホームページを見て下さい。

経験

医学部を目指した動機はよく覚えていません。実家が医薬品販売業をしており、祖父は私が小さい頃から「医者になれ」と言っていたようですので、その影響は多少あったのでしょうか。高校生の頃、将来何になるうかと考えた時になんとなく医師かなと思い、医学部を受験しました。

大阪市立大学医学部卒業後は、同第3内科（現在は消化器内科学と肝胆膵病態内科学）に入局しました。3年間の臨床経験を経て大学に戻った時、医局とつながりがあった公衆衛生学に大学院生として在籍することになりました。医学博士号を取得したらさっさと臨床に戻ろうと考えていたのですが、当時の教授でいらっしゃる先生から疫学の原理と手法を直接ご指導いただき、予想外にのめり込んでしまいました。医師といえは、「患者さん一人ひとりを診て病気を治す」ことが仕事で

す。一方で、疫学という手法を使い、集団という視点から病気を診て、リスク因子や予防因子を紐解いていくのはまた違う魅力がありました。臨床医を続けるよりも、異なる観点で社会に貢献できるかもしれないと感じました。

大学院卒業時、公衆衛生学の教員ポストが空いており、教授の先生の後押しもあって、本格的に研究者としてスタートすることになりました。多施設共同研究の取りまとめや、全国疫学調査の事務局、行政機関と連携したデータ分析など、多種多様な疫学研究の経験を積みました。共同研究者と信頼関係を築いて研究を円滑に実施するためには、理論や技術だけでなく、コミュニケーション能力がいかに大切かを痛感しました。

大学院時代に1人、教員になってから1人、子どもを出産しました。母や夫（救急医）の全面的な理解と支援があって、仕事を続けることができています。研究の世界は決して華やかではありませんし、「日々の努力がいつか結実すると信じ、一步一步進む」といった地味なものかもしれませんが、研究成果を認めていただいた時、論文として公表できた時は、言葉に表せないぐらいの充実感です。興味は尽きないですし、この先も新たな課題に挑戦していきたいと思っています。

「病院」という場での「医療」だけで、人々の健康を守ることができるでしょうか？

リフレッシュ

医学博士号を取得した際、指導教授の廣田良夫先生からお祝いとしていただいたガラスのオブジェは、世界で1つしかない大切なものです（廣田先生のご子息が作られたものです）。デスクにありますが、見るたびに「研究者としてこれからはがんばろう」と気持ちを新たにしています。プライベートでは、2人の子供と過ごすことが、「完全に仕事を離れる」という意味で良い気分転換になります。赤ちゃんの頃はちょっとのお出かけも一苦労……でしたが、長女が中1、長男が小3の今は、次のお休みどこへ行く？と計画するのが本当に楽しみです。

メッセージ

教育に携わってきた中で1つ実感するのは、「素直な人は、年齢にかかわらず伸びる」ということ。「素直」とは、イエスマンではありません。上下の関係無く、他人の良いところを取り入れ、指摘は受け止めて、自己を柔軟に修正していく能力です。また、チャンスに巡り合うためには、日々のことに真面目に取り組み、様々な人との出会いを大切にしてほしいなあと思います。



1955（昭和30）大阪市立医科大学（新制）*が編入され、医学部へ
※ 1944（昭和19）大阪市立医学専門学校
1947（昭和22）大阪市立医科大学（旧制）
1952（昭和27）大阪市立医科大学（新制）

プロフィール

- 1998 大阪市立大学 卒業
淀川キリスト教病院 常勤医師
- 2005 大阪市立大学 博士課程 修了
大阪市立大学 助手
- 2009 大阪市立大学 講師
- 2012 大阪市立大学 准教授
- 2015 大阪市立大学 教授

主要業績

- ・Fukushima W, et al. 2010 "Nationwide epidemiologic survey of idiopathic osteonecrosis of the femoral head." Clin Orthop Relat Res. 468(10): 2715-24
- ・Fukushima W, et al. 2012 "Effectiveness of an influenza A (H1N1) 2009 monovalent vaccine among Japanese pregnant women: a prospective observational study assessing antibody efficacy." Vaccine 30(52): 7630-6
- ・第25回日本疫学会学術総会 最優秀演題賞（Award of Excellence）受賞 2015

はっとり としこ

服部 俊子

医学部看護科・看護学研究科 准教授



研究

医療組織倫理（学）organization ethics in health care の構築を目指しています。

日本でも粉飾決算をした銀行や多くの会社、牛肉偽装をした食品会社、事故やデータ改ざんをした鉄道会社など、企業組織の不正事件があとをたちません。また、医療組織の不正事件もあとをたちません、研究不正、診療における倫理問題は、ニュースをかなり賑わせました。第三者として「事件」を見ると「なんて組織だ」「なんて人たちだ」と非難しがちですが、実際には不正にかかわった人は、意図的に「悪」を選んでしているわけではなく、一所懸命、その人たちの立場でよかれと思ってやっていたのに、結果として不正で事件になっ

た、ということが非常に多いし、「なんて組織だ」と言ってもその組織は実体としては無いのです。どうすれば医療組織の不正を防止でき、医療組織の倫理問題を解決する制度やシステムを作れるのか。医療組織不正という組織の倫理問題を解決すべく、哲学・倫理学研究者だけでなく、経営学、社会学、法学などの研究者も交えて医療組織倫理の構築を目指しています。

経験

研究者としての私の経歴は、研究者キャリアパスの参考にしてもらえるようなものではありません。というのも、小さいときにやりたいことを見つけそれに向かって歩むという模範的経歴ではなく、小さい頃から哲学的な問いに囚われて漂っていたら哲学研究者になった、帰結としてのキャリアパスだからです。

哲学的な問いに囚われるようになったきっかけは3歳から生活の一部になっていた好きだったこと（音楽にまつわること）を青年期前にやめたことです。それから、ただただものや人の「存在」や「無」とはなにか、という問いに囚われました。まさに「実存」的な生、ですね。哲学書も読み漁りましたが、このときは「哲学」にはつながらな

かったですが、看護職として身を置いた医療現場が哲学研究者の道に導きました。

医療は自然科学的知識を基盤にしたアプローチをとります。しかし医療現場は、数では測れない、言語では語れないことがおこる…自然科学的なアプローチの限界が露わになり、哲学的な問いが噴出する場でした。たとえば、病院の集中治療室は機械音がたくさんあるし、清潔空間にするための空調の低周波音も持続する密室です。普通、そんなところで生活したらしんどいですよね。病棟音環境を改善しようと音響工学研究者や作曲家などと「サウンドスケープ」研究を行い成果はそれなりに出ました。ほかの研究者もマスコミも当時目新しかった「病院ネタ」に注目してくれました。その一方で、私は音とはなにか、環境とはなにかといった哲学的な問いにまたまた直面。そこで自身が抱えてきた哲学的な問いを追求するために「哲学」科に入りました。ようやく自分の居場所にたどり着いた感覚でした。大学院から大阪大学文学部「臨床哲学」に関わり現在は応用倫理学に取り組んでいます。看護学科で基礎教育の担当と、医療現場の倫理支援活動もやっていますが医療者育成に哲学は欠かせないと実感しています。

ようやく自分の居場所にたどり着いた ——医療組織倫理（学）の構築へ

リフレッシュ

休日は、出張がよくあるので少ないですが、毎日できない部分の自宅の掃除、庭の雑草とり、1週間分の買い物（最近はネットスーパーも利用）、料理で終わっちゃいます。だから息抜きとしては、いかに家事的なかで好きなことをするかが勝負で、アイロンがけや家の雑務時には海外ドラマ「LAW&ORDER」を見ながらやっていますし、娘と「探偵ナイトスクープ」や「ピーバップ！ハイヒール」といった大阪ならではの番組を見てばかり笑います。出張先では、できるだけ地元の美術館に足を運び、研究者たちと地元料理を食べに行ったりしています。研究室では、甘いものをほおばり音楽を流して図録を眺めています。

メッセージ

高校生の娘が1人いますが、難病を患い看病が必要でした。大学院時代は子どもの長期入院中で病院宿泊も多かったす。夫は超多忙な職業なので両親の強力な育児支援がなければ研究者は続けられませんでした。研究時間は本当になく研究者としては不利でした。けれども、それらを体験したことで見える地平とあらたな視点が培われ、追

求すべき大きなテーマ（組織倫理の構築）をもてました。この研究は基礎研究だから時間はかかりますが、企業や医療組織で使えるシステムの構築までやり遂げたいです。

以前は子どもの看病を支援する制度はなかったですが、今は制度不備が指摘されるようになってきました。妊娠、出産、育児を支援する制度も以前より整備されました。研究会や学会の子連れ参加も可能になってきました。今あるものを最大限活用し、あらたな規範・制度を作るために声をあげてください。



1998（平成 10）大阪市立大学看護短期大学部が設置される
2004（平成 16）看護短期大学部が改組され、医学部看護学科へ
2008（平成 20）大学院看護学研究科が設置される

プロフィール

淀川キリスト教病院等で看護職に従事

- 2000 立命館大学 卒業
- 2006 大阪大学大学院 博士課程 修了
博士（医学）
- 2007 大阪大学大学院研究員ほか非常勤講師
- 2009 滋賀医科大学 講師
- 2012 大阪市立大学 准教授

主要業績

- ・Hattori T, 2005 “End-of-life care and advance directives in Japan.” Journal of Intetnational de Bioethique 16(1-2): 135-42
- ・服部俊子 2005 「医療における契約とコミュニティー contract と covenant を軸に」『現代社会理論研究』15: 293-302
- ・服部俊子・大北全俊・牧一郎・榎本直樹 2014 「「病院組織倫理」試論—病院という場をどうデザインするか」Communication-Design 11: 27-48

こいけ しほこ

小池 志保子

生活科学部・生活科学研究科 准教授



研究

居住空間のデザインを専門としています。最近の取り組みは、大阪の近代長屋の再生と郊外住宅の空き家の改修です。それぞれの地域の立地や環境は異なりますが、建物を改修することを通じて、デザインに何ができるかを探求する点は共通しています。

この夏に完成した「ともにわ長屋」は、大阪の阿倍野区にある大正時代の長屋を改修したものです。大阪では、江戸時代から長屋文化が息づいていて、長屋は伝統的な住文化の象徴です。その一方で、賃貸長屋は、クリエイティブな若年層にとってのレトロな住まいとして人気があります。

改修にあたっては、江戸時代から受け継がれて

きた長屋の小間のスケールを用い、小さいながらも豊かに住まうことを大事にしています。例えば、増築の反対、減築により失われた庭を取り戻すことで、建物の中に風や光が入ってくるようになります。それらは日頃忘れがちな四季の感覚を与えてくれます。



*2坪ほどの小さな庭が連続するとともにわ長屋。室内には耐震シェルターが入っている

経験

現在は居住空間の設計に取り組みながら、空き家などの建築ストックを活用することに関する研究を進めています。設計を仕事とするようになったのは、大学で建築を学んだからです。すごく上手だった訳ではありませんが、小さな頃から絵を描くこと、工作をすることなど、ものをつくることが好きでした。進路を選択する際に、理系だったこともあり、建築分野で学ぶことにしました。一口に建築と言っても、土木を含めた広範な領域をカバーする学科やプロダクトデザインを含む芸

術系の学科など、その専門分野には広がりがあります。絵を描く延長としてのデザインに興味があったので、入学試験にデッサンの実技がある学校を選び、京都工芸繊維大学の造形工学科に入学しました。

入学後は建築コースに進み、家づくりがしたい、自分で事務所を持って設計がしたいと思うようになりました。そのために大学院では、設計だけではなく、設計活動の論理的な裏付けとなる建築史について学びました。卒業後は設計事務所で働き、その後、独立して、2002年に設計事務所を共同で立ち上げました。

大学院での研究を通して、現代の居住空間は過去につくられた膨大な空間の蓄積の上に成り立っていることに気づきました。また、設計活動を通して、今そこにある建築を対象に建築をつくること、あるいは、つくらないで使うことによって、社会問題の解決の手掛かりが見出せることが分かってきました。

独立して5年目に本学で研究に従事することになり、これまで取り組んできた実践と理論を相互に捉えながら研究を深めています。

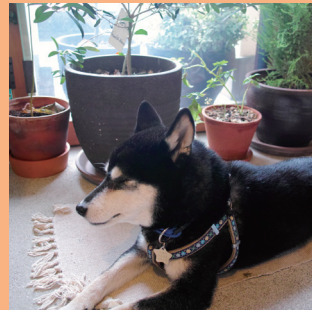
小さなことから、社会のこと・都市のことを考えてみると、重要なこと・やりたいことが見えてくるように思います。

リフレッシュ

夫が育てている植物、おいしいコーヒー、心地よい光と風、この3つが揃うと一息つけます。さらに、今年の夏休みに犬がやってきました。慌ただしい生活を見直すきっかけになり、早朝に娘と一緒に散歩することが楽しいです。近所の人と立ち話をする機会も増えました。

メッセージ

日々の暮らしを大事にしながら、自分の身の回りにある小さな疑問や問題意識を大事にしています。その小さなことから、社会のこと、都市のことを考えてみると、重要なこと、やりたいことが見えてくるように思います。忙しさに紛れてしまいがちですが、5年ぐらい先のことを具体的に見据えながら、今後も新しいことに取り組んでいきたいです。



プロフィール

- 1998 京都工芸繊維大学 卒業
- 2000 京都工芸繊維大学大学院 前期博士課程 修了
中村勇大アトリエ
- 2002 ウズラボ共同設立
- 2004 一級建築士 資格取得
- 2006 大阪市立大学 助手→助教授
- 2011 博士（工学）
大阪市立大学 准教授

主要業績

- ・グッドデザイン・サステナブルデザイン賞（経済産業大臣賞）「豊崎長屋」共同受賞 2011
- ・Regional Holcim Awards 2011 Asia Pacific Acknowledgement prizes "Post-earthquake housing renovation（「木材加工所事務所棟＋集合住宅5カ年計画」）" 共同受賞 2011

Interview

あくざわ まりこ

阿久澤 麻理子

創造都市研究科 教授



研究

教育社会学の領域で、人権教育を研究しています。具体的には次のような研究をしています。

- ・量的調査、質的調査を通じて、市民社会の人権意識の位相（人権概念・基準に対する理解、マイノリティや社会的弱者に対する意識等）を把握し、差別・社会的排除に抗する人権教育のありかたを研究しています。
- ・人権教育における、マイノリティのエンパワメント（自らの権利や立場性を学ぶことによって、差別や排除に抗する主体として成長すること）について研究しています。
- ・日本、そしてアジア太平洋地域の人権教育について研究しています。

経験

1983～87年、私の学生時代は、円高、バブル経済の真ただ中で、多くの同級生が金融機関に就職しました。女性差別撤廃条約の批准と、男女雇用機会均等法の施行によって、女性「総合職」の選択肢も生まれた頃でした。金融には就職できない大雑把な自分の性格は棚に上げ……ではありませんが、そんな時代だからこそ、何かを「つくる」仕事がないという強い思いがあり、大学在学中から、染色の仕事を始めました。最初に仕事をしていたのは江戸手描き友禅の工房です。

その後、染色の知識も活かしながら海外協力ができる、ということで、民間の海外協力団体に転職（曹洞宗国際ボランティア会）、さらに、日本に移住労働者として働きに来ている人たち、難民として定住した人たちなどの相談、調査などに関わる仕事（神奈川県国際交流協会）も経験しました。

こうした人びととの出会いが、人権を研究するようになったきっかけです。不当な労働条件や労働災害、性産業での強制労働、オーバーステイの子どもたちの教育、DVなど様々な相談を受けました。そして彼らが、こうした問題を人権の問題として語り、解決を求める姿に、大きな影響を受

けました。また、1990年、国際識字年に開催された国際会議の事務局を担当したことが、部落解放運動をはじめ、人権の実現を求める市民社会の運動と出会うきっかけとなりました。

ところで、仕事を通じて、人権の実現を求めるためには、必要な調査・研究を市民社会と連携して行い、必要な施策の根拠を示すことの重要性を痛感するようになりました。これが動機で、社会調査を学ぼうと大学院に入学したのは、29歳の時です。子ども一人を連れて、奈良教育大学で部落問題について長年調査をしてこられた中川喜代子先生（大阪市大で女性として初めて社会学の博士号を授与されたと聞いています）の研究室に入りました。修士を終えたのが31歳。教育大学ですから博士課程がなく、その後、調査の仕事を頂いたり、各地の大学で非常勤講師をし、ようやく34歳の時に姫路工業大学で常勤講師の仕事に就きました。

子育てと研究……正直、あまりにも忙しかったので、子どもが高校生になるまでは、日々どのように回っていたのか、記憶もあいまいです（笑）。長男の高校受験（寮のある高校）に合わせて、海外での調査研究を行うためのフェローシップに私も応募しました。長男の高校入学と同時に、私も7か月フィリピン、マレーシアに行きました。思

彼らが、「人権の問題」として語り、解決を求める姿に、大きな影響を受けました。

う存分調査・研究しました！但し、この時ばかりは、実家の両親に本当にお世話になりました。人生あまり計画的には生きていません。でも何とか回って来た……が実感です。

リフレッシュ

「畑」。7メートルくらいの畝4本。息抜きというより、シャカリキにやっています！一番つらいのは、朝飯前の夏の水まきです。創造都市研究科は平日夜間の授業なので、帰宅して早く寝ないと早朝に起床できません（笑）。あまり手をかけられない自然農法（？）ながら土に触れ、自分の食べものを創ることが、心のバランスをとるには一番だと感じています。

メッセージ

研究成果は社会のものだと思います。成果を出していくことは、大変なことですが、競争だけを意識するのではなく、自分自身もしあわせに、バランスよく生きること、社会の中の一人として、大切な役割を担っていると感じてくださいね。みなさんの研究も調査も、たくさんの人たちに支えられているはず。40歳代で病気を経験し、

気づかされたのは、「私には大切な仲間や友人がいること」。これからは、仲間とつながり、個人ではなく、共同性を追求しながら研究したいと思っています。



プロフィール

- 1986 江戸手描き友禅工房
- 1987 上智大学 卒業
曹洞宗ボランティア会職員
- 1989 (財)神奈川県国際交流協会職員
- 1995 奈良教育大学 修士課程修了
山本登研究室 嘱託研究員
- 1998 兵庫県立姫路工業大学 講師→助教授
- 2004 大阪大学大学院 博士後期課程 修了
博士（人間科学）
- 2011 大阪市立大学 教授

主要業績

- ・阿久澤麻理子 2006『フィリピンの人権教育—ポスト冷戦期における国家・市民社会・国際人権レジームの役割と関係性の変化を軸として』解放出版社
- ・阿久澤麻理子 2012「人権教育再考—権利を学ぶこと・共同性を回復すること」石崎学・遠藤比呂通編著『沈黙する人権』法律文化社

ロールモデル集の意義——未来へ

服部良子

生活科学部・生活科学研究科 准教授／女性研究者支援室 運営委員

ロールモデルはどのような意味をもつか。2015年の現在、はたして女性研究者のロールモデルは必要なのだろうか。基本的に本来、研究者のモデルは女性でも男性でもどちらでもよい。男女ともに研究者になるには、第一に“研究を止めない”ことが最重要である。一般に止めないで続ければ、研究者への道は開ける。

しかし、研究継続を妨げる条件は男女に等しく存在しない。統計的にみても男性の方が研究を続けやすい。その理由は結婚、出産、育児、介護というライフイベントと他者へのケア労働という“家族的責任”である。20世紀以来の工業社会の分業システムは家庭を営む男女のジェンダー分業として家族的責任は女性が担当する。これは社会制度と社会意識として組み込まれ定着している。研究者に限らず働く女性は男性より家族的責任の負担がかかりやすい。そして負担について、女性は負担がかかる前から考慮し

意識し悩まざるをえない。

この負担を上手に受けとめながら辞めなくて続ける女性研究者が存在することを広く知らしめることは、これまでのロールモデル集の最大の目的といえよう。そしてロールモデルについて女性と男性の決定的な違いは、ライフイベントとの兼ね合いである。つまり研究生活、教育職業責任と育児・介護という“家族的責任”との両立問題ということになる。

ところが“女性にとっての両立問題”は世界的には20世紀、つまりもはや過去の問題である。21世紀の先進工業国の最高学府で研究教育にたずさわるインテリジェンスあるひとびとにとっては、女性も男性もともにケア労働を中心とする“家族的責任”を担うことは科学的知見に基づく共通認識とされている“はず”だからである。研究職生活と家庭生活の両立は、すでに21世紀の「男女」研究者の共通課題といえる。

そうであるならいま日本の大学で求められるのは、圧倒的にすごい業績をだす女性研究者や阿修羅のごとく24時間奮闘するスーパーウーマン研究者モデルだけではない。女性研究者の卵たちの絶望をうすめるのは、まず子育てをするイクメン研究者ロールモデルの発信である。さらに育児や介護というケア労働をする同僚を理解し共感し、そして支援する男女研究者ロールモデルこそ新しいステージのために示される意義がある。

したがって新しい男性ロールモデル、新しい男性キャリアプラン提起という本来21世紀的ロールモデルによる課題達成は次回以降に譲らざるを得ない。2015年の大阪市立大学が現在と未来の女性研究者たちに向けて発信するこのロールモデル集は、まずは女性の両立志向という20世紀的課題の提起という意義をもつといえよう。

男女共同参画担当 副学長
大嶋寛

大阪市立大学は、自らを「全ての人間の尊厳と平等の精神に立脚した学問の府」（人権宣言；2001年）と位置づけ、多様性（ダイバーシティ）の視点から性別に基づく差別的取扱いの是正に取り組んできました。現在、本学には、女性教員158名（16.8%；特任教員等を含む）、女性職員350名（62%；短時間勤務職員を含む；杉本キャンパス）が勤務していますが、仕事と家庭生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）や大学運営における意志決定への女性参画、上位職への積極的な女性登用などについて、さらに継続して取り組みます。

2015年8月には、1999年の男女共同参画社会基本法に続く、女性活躍推進法が成立しました。女性が安心してその能力を活かせる社会の構築にむけた国としての取り組みが示される中、本学も改めて「男女共同参画推進宣言」を発表し、男女共同参画社会への積極的な寄与を表明しました。

本学には、8,325名（2015年5月1日現在）の学部生・大学院生が学んでいます。学生諸君には、「男女の別なく、その個性と能力を充分に発揮できる社会」の担い手となるべく、本学で学び、多様性を理解する社会人として大いに活躍することを期待します。

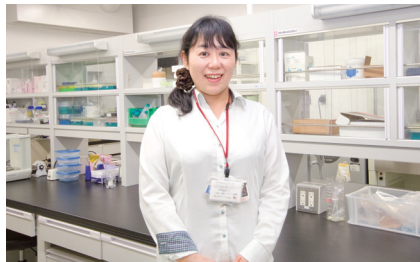
大嶋寛

Interview

ふじい りつこ

藤井 律子

複合先端研究機構／理学部・理学研究科 准教授



研究

光合成生物が光を利用する仕組みを研究しています。光合成という緑の葉が太陽の光で二酸化炭素とデンプンを作る事を思い浮かべると思えます。太陽の光を取り込んで植物が使いやすい形に変える動きをするのが「光合成色素」です。その中には青いクロフィルや黄色いカロテノイドがあり、私は主にカロテノイドの働きについて研究しています。ワカメ、モズクやヒジキなどの海藻は褐色や黒っぽい色をしています、これも同じような色素群を使って光合成をしています。ただし、タンパク質にカロテノイドが結合すると黒っぽく見えます。ワカメをゆでると鮮やかな緑色になるのは、カロテノイドがタンパク質から外れて

もとの色に戻るからです。エビやロブスターをゆでると鮮やかな赤色になるのも似たような仕組みです。このような色が変わる仕組みに興味を持って研究しています。

経験

幼少期からチクチクと細かいためや絵を描くのが得意で、「研究者」という職業に魅力を感じたのも好きなことに没頭できるはずと思ったからです。学生時代の物理化学実験で、ほうれん草から色素を抽出し、カラムクロマトグラフィーで分離した時の綺麗な色に魅せられ、このテーマを選びました。研究室は厳しくて有名で学生の人気は最低でしたが、国際的で活気がありました。特に大学 4 年次にグラスゴー大学へ短期留学した際の経験は、その後の研究活動に大きな影響を与えました。その中で出会った女性研究者の“Life with Science”という言葉が印象に残り、結婚して家庭を持ちながらも生涯をかけて研究と向き合う事を決意しました。修士 1 年次に阪神大震災を経験し、その後、博士課程へ進学しました。討論で、教授の「データを示せ、無いなら経験のある私に従え」という意見に返答できなかった時、「ワーキングタイムには討論で決めた実験を行い、

時間外に自分で考えた実験を行ってデータで示してやれば？」という同級生の助言に従って、次の討論ではコツコツ貯めたデータを示すと、教授はすんなり納得して私の意見に賛同してくれました。この「きちんとデータを示せばどんな人も説得できる事」が私の研究の原体験になっています。学位取得後は、博士研究員としてそのまま在籍し、結婚準備もあって多忙な日々でしたが、結婚式前日に大阪市大に博士研究員として就職が内定しました。就職後、5 年目に第一子を授かり、回復には数年かかりながらも、9 年目に准教授として正規雇用されました。その後、第二子を授かり、今に至ります。出産後、ライフワークバランスや政治経済にも関心が高まり、新鮮な日々を過ごしています。「納得がいくまで時間をかけて実験をする」という以前の研究スタイルはなかなか実現できなくなりましたが、周りのサポートを受けながら研究ができることに幸せを感じています。

リフレッシュ

最近、小 2 の息子の話を聞いたり、本を読んだり、1 才になったばかりの末っ子をあやしたりしています。知り合いの名誉教授のバジルレッシングに感動してから、バジル栽培もしてい

うまくいかない時もめげずにできる事を精一杯やり、
継続する事を「自然体」と表現して、大切にしています。

ます。息子も「ママの緑のパスタ」が好物。土いじりと収穫、調理は楽しいです。研究者との飲みものにケーション、行きつけのお店での井戸端会議も大切な息抜きです。

メッセージ

出産、育児は計画通りに行かない事ばかりですが、研究も似たようなもので、必ず緩急の波があるものです。自分自身や周囲の変化に柔軟に対応して、うまくいかない時もそれにめげずにできる事を精一杯やり、継続する事を「自然体」と表現して、大切にしています。育児はまだ始まったばかりですが、子どもが健康で、幸せに思いっきり生きていけるようにしてあげたいと思っています。一方、私の研究を通して真実の一端でも徐々に明らかになっていくように、積み重ねても大丈夫なしっかりした礎となる研究成果を出していきたいです。



プロフィール

- 1994 関西学院大学 卒業
- 1999 日本学術振興会 特別研究員 (DC2)
- 2001 関西学院大学大学院 博士課程後期課程 修了 博士 (理学)
日本学術振興会 特別研究員 (PD)
- 2002 光エネルギー変換研究センター 博士研究員
- 2004 大阪市新産業創成センター 博士研究員
- 2006 大阪市立大学大学院 博士研究員
- 2010 大阪市立大学 特任准教授
- 2013 大阪市立大学 准教授

主要業績

- Fujii R, et al. 1998 "The 2Ag- Energies of All-Trans-Neurosporene and Spheroidene as Determined by Fluorescence Spectroscopy." Chem. Phys. Lett., 288: 847-53
- Fujii R, et al. 2008 "Construction of Hybrid Photosynthetic Units Using Peripheral and Core Antennae from Two Different Species of Photosynthetic Bacteria: Detection of the Energy Transfer from Bacteriochlorophyll a in LH2 to Bacteriochlorophyll b in LH1." Photosyn. Res. 95: 327-37
- 大阪市立大学 女性研究者特別賞 [岡村賞] 受賞 2014

Interview

なかだい(かげ) えりこ

中臺(鹿毛) 枝里子

複合先端研究機構／生活科学研究科 デニュアトラック特任准教授



研究

環境ストレスや食餌に対する生体応答を調べるために線虫 *C.elegans* を用いています。線虫 *C.elegans* は非寄生性の線虫であり、体長は成虫でも 1mm、体細胞は 1,000 個ほどしかありませんが、神経系、筋、消化管など基本的な組織、器官をそなえています。遺伝子レベルでもヒトと多くの共通点があります。ヒトにまで通じる様々なメカニズムが明らかになったので、これまでに 6 人もの *C.elegans* 研究者がノーベル賞をとったほどです。高齢化が進む今、健康寿命の延長は重要な課題ですが、線虫 *C.elegans* の寿命は 3 週間程度と短いため老化基礎研究の簡便なモデルとしても注目されています。我々は現在、加齢に

伴い変化する生体機能やバイオマーカーの同定を行っています。また食品成分やプロバイオティクスがどのように生体防御機構や寿命に影響するのか、個体、細胞、遺伝子レベルで評価しています。

経験

子どもの頃から、虫や動物が大好きでした。両親も理系で、深く考えず高校で理系を選択しました。理系学部の中でも生物系かなという感じで、女子なので手に職系の資格が取れる方がというよくある理由と、医者としてやっていく自信はないという消去法で薬学部に進みました。教授の講義に感銘を受け、実は厳しいことで有名な研究室に入ってしまったのですが、薬剤師になるという志をもたない不屈き者だったので、実務実習にも行かず実験をしていました。国家試験には合格したものの、登録申請するのを怠っていたため登録が 2 年後になってしまい、履歴書を書くたびに後悔しています。

大学院で現在の研究に繋がるテーマに出会いました。なかなか思ったような結果はついてきませんでしたが、2 年くらいたったある日、後輩の発見がきっかけで研究が進み、学位を取得し、インパクトの高い研究成果を発表すること

ができました。

アカデミア研究者としてやっていけるのか不安を抱いていたこともあり、やや後ろ髪を引かれる思いで企業の研究員となりましたが、学生の頃とは違う研究へのモチベーションの持ち方に戸惑いを感じました。会社の大先輩がおっしゃったのは、企業研究では、登ると決めた山に登らないといけない、アカデミア研究では脇道にそれてしまって別の山に登ってしまうこともある、ということでした。勉強できたことも多く、2 年目には社内結婚をしたため、私の人生には大きなプラスの影響があったのですが、私自身はあまり役に立てませんでした。

その後縁あって大学に助教として戻り、線虫分子遺伝学にどっぷりと浸って研究を進めました。6 年目に出産してからは研究に割く時間が大幅に減ってしまいましたが、周りには温かくサポートしていただきました。産後復帰して間もない頃、本学の採用試験を受けました。面接の日に学内保育園の見学をさせて頂き、安心して仕事ができそうだと面接もまだ受けていないのに喜びました。子どもとともに大学に通う毎日です。

アカデミア研究では、脇道にそれてしまって、別の山に登ってしまうこともある。

リフレッシュ

とにかく子どもと過ごしています。息抜きであるような息抜きでないような、でも間違いなく一番大切な時間です。最近おしゃべりができるようになり、意表をつく答えが返ってきたりして面白いです。好きな食べ物は、スイカ→ういろ(山口県産)→焼肉→水茄子のぬか漬(ごく浅く漬かったもの)→ブリしゃぶと変遷しています。

メッセージ

これまで自分が受けてきた恩を、次の世代に引き継いでいかなければならないと思います。自身が男女の違いをあまり意識せずにきたため、またそういわれる環境にいたため、女性研究者や女子学生の方々にとりたててどうこうとアドバイスはできないのですが、私のような者でも家庭を持ち、研究も続けております。歴代の女性研究者達の努力や社会情勢、価値観の変化等により、今は様々な道を選びやすくなっていると思います。皆さんにはさらなる可能性が広がっているのではないのでしょうか。



プロフィール

- 1999 九州大学 卒業
- 2001 九州大学大学院 修士課程修了
- 2004 東京大学 博士課程修了
博士(薬学)
三共株式会社(現・第一三共株式会社) 研究員
- 2007 東京女子医科大学 助教
- 2012 東京女子医科大学 講師
- 2014 大阪市立大学 デニュアトラック特任准教授

主要業績

- ・Kage E, et al. 2005 "MBR-1, a novel helix-turn-helix transcription factor, is required for pruning excessive neurites in *Caenorhabditis elegans*." *Current Biology* 15: 1554-9
- ・Kage-Nakadai E, et al. 2014 "A conditional knockout toolkit for *Caenorhabditis elegans* based on the Cre/loxP recombination." *PLoS One* 9: e114680

ふるくぼ さくら

古久保 さくら

人権問題研究センター長
創造都市研究科 准教授

研究

専門は近現代女性史・ジェンダー論で、主要関心は、新中間層でない女性を中心とした社会史ならびに女性運動・フェミニズムのあり方にあります。

もともとは、近代日本の農村女性史研究をしていました。近代日本の農村においては、一方では女子中等教育の理念である「良妻賢母」が浸透しており、もう一方では女性は何よりも農業労働力として期待されながら、低い地位を強いられていました。だからこそ、農村女性は植民地への農業移民という侵略政策に抗い生きることができず、敗戦後の満州での性暴力という悲劇に巻き込まれることになったのだと考えています。

名も残さなかった女性たちが社会や政策に巻き込まれながら、社会矛盾を集積・体现しながら生きてきた、そのことを丁寧に語る歴史学を研究していきたいと思っています。

現在の研究テーマの一つは「婦人保護施設から見た戦後日本の女性の貧困」というものです。敗戦後の売春状況やそこにかかわった女性たちの生活実態をあきらかにし、性暴力と売春の連続性に留意しつつ、当時の女性支援者たちの活動・運動や女性福祉政策を、どのように評価することができるのかを考えています。

経験

「イマドキ女性差別なんてありっこないじゃん？」というのは、35年前の私のせりふです。私が今の研究をするに至ったのは、ひとえに出身大学と学友の「おかげ」かもしれません。1980年に入学し、女子トイレが男子トイレの中にあるような環境でした。学内の噂になったレイプ被害者について語る男子学生の差別的な態度、「女の子に紹介できる就職口はないよ」とのたまたま男性教員、就職口は教員か弁護士か公務員しかないと自衛を考える先輩女子。リベラルな家庭で温室育ちの私は一つ一つの出来事に「はあ？なんじゃそ

れ？？」とびっくり状態。「いやー、女の子ってタイヘンなんや！！」と思って、フェミニズムや女性問題に関心を持つようになりました。

卒業研究で女性史を研究したいと表明すると、周りの院生・教員から「女性史をやって何の社会的・学問的意味があるの？」と真顔で聞かれ、「女性の人生は社会的意味がないとされているの？」と衝撃を受け、いよいよ女性のことを研究しようと決意しました。女性学・ジェンダー論研究では、結婚や出産といった個人的経験、職場や地域での様々な人との出会いや軋轢といった社会的経験のすべてが研究対象となります。

たとえば、母であることが強く期待されることの息苦しさや性暴力に対する不安や戸惑いなどを社会的なものとして言語化するのが、女性学・ジェンダー論の真骨頂といえます。私自身、母親に対する社会的圧力を感じるにつけ、女性学・ジェンダー論で学んだ知識で対抗したり、あるいは自分の正当性を信じながら耐え忍んで過ごしてきました。

1985年の女性差別撤廃条約の日本批准に代表されるように、世界的なジェンダー平等を実現しようとする機運の中で、1990年代から女性学・ジェンダー論のプロパーとしてのポストが大学に設けられるようになりました。女性としての自分

「女性の人生は社会的意味がないとされているの!？」 —— いよいよ女性のことを研究しようと決意しました。

メッセージ

研究上の自らのこだわりがどこにあるかを常に自分に問いかけ、一番のこだわりを研究論文に反映できるようになると、道は開けていきます。矛盾ある社会のなかで女性が成功するのはたやすいことではありませんが、他人の借り物ではなく、自分の物差しをつくり、何が成功なのかを納得いくまで考え続けるとき、自分の望む人生の姿が見えてくる。多様な人々から刺激を受けつつも、己(だけ)の道を探求し続けることが人生の醍醐味です。



リフレッシュ

NPO 法人ウィメンズアクションネットワークの理事として女性運動の情報やフェミニズムの議論を web 発信する活動をしています。地方に講演に行ったときに運営しているサイトをほめられたりすると、「やってよかった」としみじみ。NPO 活動にストレスがないとはいいませんが、大学業務と NPO の活動は相互にストレス解消になっています。

仕事が忙しすぎるときは「妄想旅行」へ。極めて具体的な計画を立てて楽しんでいます。

1973 (昭和 48) 同和問題研究室が設置される
2000 (平成 12) 同和問題研究室が改組され、人権問題研究センターへ

プロフィール

- 1984 京都大学 卒業
- 1986 京都大学大学院 修士課程 修了
- 1989 日本学術振興会 特別研究員
- 1992 京都大学大学院 博士後期課程 満期退学
- 1995 アメリカコーネル大学
ビジティング・プロフェッサー
- 1998 北海道大学 助手
- 2000 大阪市立大学 准教授
- 2015 人権問題研究センター長

主要業績

- ・木村涼子・古久保さくら編 2008『ジェンダーで考える教育の現在—フェミニズム教育学をめざして』解放出版社
- ・天野正子他編 2009『新編日本のフェミニズム8 ジェンダーと教育』岩波書店 (共著)
- ・天野正子他編 2009『新編日本のフェミニズム10 女性史・ジェンダー史』岩波書店 (共著)

宮野道雄

女性研究者支援室 運営委員長
研究担当 副学長

大阪市立大学における女性研究者の研究環境整備に関わる検討は、ワーキングの設置やアンケート調査による問題把握に始まりました。その後、女性研究者支援室設置および科学技術振興機構の女性研究者研究活動支援事業への選定によって本格的に推進され、現在に至っています。

本学の特徴の一つは女性教員比率が高い部局と

逆に極端に低い部局が並存することです。一方、学生については女性教員が少ない部局では相対的に女子学生の比率も低かったのですが、近年少しずつ増加していますし、大学全体でも4割に近づこうとしています。

このロールモデル集は、女性教員や女子学生が少ない部局の女性研究者にも参考になるよう、幅広い分野から寄稿していただきました。ここに記載された経験を読むと、皆さんが様々な困難に負けず強い意志を持ち続け、道を切り拓いてきたことがわかります。しかし、それは一人の力で成し遂げられたのではなく、周りの人々の支えがあっ

てできたことと、またそれへの深い感謝の念が示されていることが印象的です。

若手女性研究者の皆さんには、このロールモデル集によって多様な女性研究者の姿を知っていただき、ご自身の可能性を拡げ、次の世代へのモデルになってほしいと願っています。

宮野道雄



大阪市立大学 女性研究者支援室の取組紹介

本学は、平成24年11月に女性研究者支援室を開設し、平成25年度に本学の事業が文部科学省 科学技術人材育成費補助事業 女性研究者研究活動支援事業（一般型）に採択されました。女性研究者支援室には、室長、コーディネーター、事務職員を配置し、事業を推進しています。本事業は、1) 女性研究者に対する支援体制の確立、2) 教育・研究環境の整備、3) 出産・育児環境の整備、4) 学内の意識改革、5) 次世代の研究者育成・啓発活動の5つの柱で構成されています。

1 女性研究者に対する支援体制の確立

- ・インセンティブ経費の創設
- ・相談窓口の開設／メンター制度の創設

「女性教員採用推進経費及び昇任支援加速経費」を創設し、新規採用、及び上位職への積極昇任を促進しています。また、相談窓口では学内外の専門機関紹介や情報提供に加え、メンター制度も実施しています。

2 教育・研究環境の整備

- ・研究支援員制度の実施
- ・女性研究者ネットワークシステムの運用

子育て、介護中の研究者に研究支援員を配置しています。「人材データベース」と「SNS」の機能を持つ「女性研究者ネットワークシステム」を運用し、情報交流を促進しています。

3 出産・育児環境の整備

- ・保育サポート制度の実施
- ・学内保育所の利用促進

保育サポート事業（夜間・休日・病児・病後児・学童保育利用料補助）やイベント時の一時保育サービスを実施し、保育サービスの充実度を高めています。女性研究者支援室ホームページに、実施制度や育児関連のバナーを作成し、支援情報を提供しています。

4 学内の意識改革

- ・シンポジウム、各種セミナーの開催
- ・広報誌、報告書等の発行
- ・アンケート調査の実施

意識啓発のためのシンポジウム、ロールモデルセミナーなどを開催しています。子育て中の男性・女性研究者の活躍について、ホームページでのインタビューの掲載や広報誌の発行により情報発信も行っています。

5 次世代の研究者育成・啓発活動

- ・女性研究者表彰「岡村賞」の創設
- ・理系女子学生による進路相談会の開催

女性研究者表彰制度「岡村賞」を創設し、次世代の研究者育成のために女性研究者の表彰を行っています。キャリアパス支援の一環として、オープンキャンパスで理系女子学生による進路相談会も実施しています。



大阪市立大学 女性研究者支援室
558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138
ocu-support-f@ado.osaka-cu.ac.jp
<http://www.wlb.osaka-cu.ac.jp>